

いろいろな本に出逢おう！！

直木賞作家の朝井リョウさんのインタビューを紹介します。朝井さんは、大学在学中に書き上げた『桐島、部活やめるってよ』でデビューし、今年で作家生活 10 周年を迎えました。そんな朝井さんは、幼いころから文章を書くことが好きで、小中高と読書もたくさんしていたそうです。

中学校の夏休みの作文の宿題では、実際のクラスメイトを登場人物にした『バトル・ロワイヤル』風の小説を書きました。しかし、その内容が生徒全員が死ぬ結末なので、宿題として認められないと却下されてしまいました。でも、国語の先生が小説として面白いから、人物の名前（学級の仲間）を変えて提出し直せば「宿題」として認めてもらえるように掛け合ってくれました。そのときに、1つの小説として内容を評価してもらえたことがスゴくうれしかったと語っています。

幅広い読書で多様な視点が身につく

——本を読むことに関して、どんな考えをお持ちですか？

朝井：多くの人がそうだと思うのですが、僕は小中高校時代は、共感できる本ばかり読んできました。共感、自分を認めてもらえたような安心感をもたらしてくれるので、それはそれで良いのですが、それだけでは自分を変えることはできないんですよね。

また、内容的にも、社会や教師に反発する話や友情や努力がテーマになったフィクションにありがちな物語ばかり読んでいると、若いうちはそれが実際の社会における「正解」だと思い込んでしまい、自分にとっての「正解」を探せなくなってしまいます。

——では、どんな読書が理想的ですか？アドバイスをお願いします。

朝井：自分の経験から言うと、あえて共感できない本を読むことも大切だと思います。

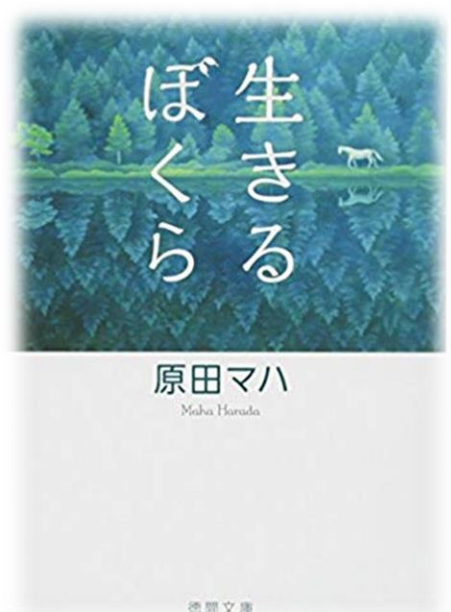
「自分ならこのセリフにこう返す」とか「このキャラクターは許せない」という違和感のあるものに、僕自身 10 代のうちにたくさん出会えていたら、もっと早くに考えが広がっていた気がします。

自分にとっての「正解」と社会にとっての「正解」が違うことは、経験を重ねて大人になるにつれ、わかってくるものです。けれど、いろいろな本を読んで、疑問を感じ、思考すると、早くからさまざまな視点が養え、「正解」は 1 つではないと知ることができます。自分にとっての「正解」を早く見つけることで、救われることもある気がするのです。

ぜひ一度、今まで自分が手に取らなかった本を読んでみてはいかがでしょうか？

いつも青春物の小説を読んでいる人、いつもミステリーばかり読んでいる人、いつも恋愛物を読んでいる人、ときには、小説じゃなくて説明的な文章の本を手にとったり、スポーツ選手のハウツー本を見てみたりと、ぜひ、自分の興味の幅を広げる読書もしてみてもいいかもしれません！！

図書室よりオススメの文庫本！！



『世界地図の下書き』
朝井リョウ著・集英社文庫

インタビューを紹介した朝井リョウさんの小説。表紙の絵は、ジブリの近藤さんが担当し、物語の世界観をよく表現している。児童養護施設を舞台に4人の小学生たちの作戦が始まる。

希望に満ちたラストを目指して、ぜひ、朝井さんの本を片手に！！

『サクラ咲く』
辻村深月著・光文社文庫

本校の学校図書館司書の木村さんのオススメの本です。いくつかの短編がおさめられている作品集。

ああ、学校の図書室って良い場所だなあと感じてもらえる話もあります。

3つの短編が少しずつながら、1つの作品となっている。君は気づけるか？

『生きるぼくら』
原田マハ著・徳間文庫

『生きるぼくら』タイトルがとってもいい！！いじめ。ひきこもり、24歳、4年ぶりの外出、米づくり。

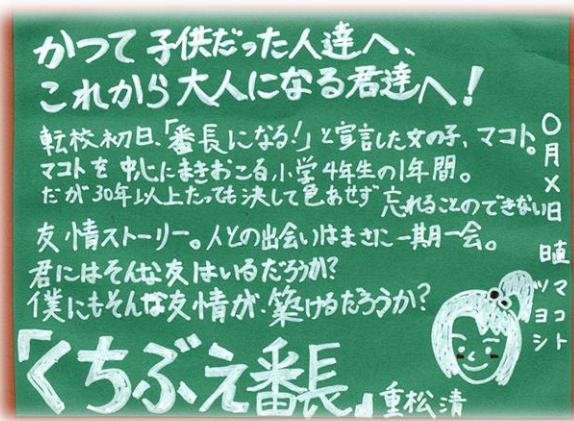
生きるのがつらかったり、少し元気がないときに主人公と一緒に物語を読み進めて、勇気を得よう。

原田マハが描く人間はとても素敵なのでぜひ！！

ポプラ社という出版社が「全国学校図書館 POP コンテスト」を行っている。2018年の受賞作POPで、みなさんと同じ中学生の作品を紹介して終わりにします。



島本町立第一中学校 3年生の作品



私立明星中学校 1年生の作品